

議案第 48 号

公益的法人等への職員の派遣等に関する条例の全部を改正する条例について

次のとおり、公益的法人等への職員の派遣等に関する条例の全部を改正することについて、地方自治法（昭和 22 年法律第 67 号）第 96 条第 1 項の規定により、本議会の議決を求める。

令和 4 年 3 月 17 日提出

湯梨浜町長 官 脇 正 道

公益的法人等への職員の派遣等に関する条例の全部を改正する条例

公益的法人等への職員の派遣等に関する条例(平成16年湯梨浜町条例第23号)の全部を改正する。

(趣旨)

第1条 この条例は、公益的法人等への一般職の地方公務員の派遣等に関する法律(平成12年法律第50号。以下「法」という。)第2条第1項及び第3項、第5条第1項、第6条第2項、第9条、第10条第1項及び第2項並びに第12条第1項の規定に基づき、公益的法人等への職員の派遣等に関し必要な事項を定めるものとする。

(職員の派遣)

第2条 任命権者は、法第2条第1項各号に掲げる団体のうち次に掲げるものとの間の取決めに基づき、当該団体の業務にその役職員として専ら従事させるため、職員(次項に定める職員を除く。)を派遣することができる。

- (1) 町が資本金その他これに準ずるものを出資し、かつ、町内に主たる事務所を有する団体で、規則で定めるもの
- (2) 前号に掲げるもののほか、その業務の全部又は一部が町の事務又は事業と密接な関連を有するものであり、かつ、町がその施策の推進を図るため人的支援を行うことが必要であるもので、規則で定めるもの

2 法第2条第1項の条例で定める職員は、次に掲げる職員とする。

- (1) 臨時的に任用される職員その他の法律により任期を定めて任用される職員及び非常勤職員
- (2) 地方公務員法(昭和25年法律第261号)第22条に規定する条件付採用になっている職員(規則で定める職員を除く。)
- (3) 湯梨浜町職員の定年等に関する条例(平成16年湯梨浜町条例第25号)第4条第1項の規定により引き続いて勤務させることとされ、又は同条第2項の規定により期限を延長することとされている職員
- (4) 地方公務員法第28条第2項又は湯梨浜町職員の分限に関する条例(平成16年湯梨浜町条例第24号)の規定により休職にされ、又は同法第29条第1項の規定により停職にされている職員その他の同法第35条に規定する法律又は条例の特別の定めに基づき職務に専念する義務を免除されている職員

3 法第2条第3項に規定する条例で定める事項は、次に掲げる事項とする。

- (1) 第1項の規定による職員の派遣(以下「職員派遣」という。)に係る職員の職員派遣を受ける団体(以下「派遣先団体」という。)における福利厚生に関する事項

- (2) 前号に規定する職員の派遣先団体における業務の従事の状態の連絡に関する事項
(派遣職員の職務への復帰)

第3条 法第5条第1項に規定する条例で定める場合は、次に掲げる場合とする。

- (1) 職員派遣をされた職員（以下「派遣職員」という。）が派遣先団体の役職員の地位を失った場合
- (2) 派遣職員の職員派遣が法又はこの条例の規定に適合しなくなった場合
- (3) 前条第1項の取決めに適合しなくなった場合
- (4) 派遣職員が地方公務員法第28条第1項第2号又は第3号に該当することとなった場合
- (5) 派遣職員が地方公務員法第28条第2項各号のいずれかに該当することとなった場合又は水難、火災その他の災害により生死不明若しくは所在不明となった場合
- (6) 派遣職員が地方公務員法第29条第1項第1号又は第3号に該当することとなった場合

(派遣職員の給与)

第4条 派遣職員（企業職員（地方公営企業等の労働関係に関する法律（昭和27年法律第289号）第3条第4号の職員をいう。以下同じ。）である派遣職員及び技能労務職員（地方公務員法第57条に規定する単純な労務に雇用される職員であって、企業職員以外のものをいう。以下同じ。）である派遣職員を除く。第6条において同じ。）のうち、法第6条第2項に規定する業務に従事するものには、その職員派遣の期間中、給料、扶養手当、地域手当、住居手当及び期末手当のそれぞれ100分の100以内を支給することができる。

(職務に復帰した職員に関する湯梨浜町職員の給与に関する条例の特例)

第5条 職員派遣後職務に復帰した職員（企業職員である職員及び技能労務職員である職員を除く。）に関する湯梨浜町職員の給与に関する条例（平成16年湯梨浜町条例第42号。以下「給与条例」という。）第26条第1項の規定の適用については、派遣先団体において従事していた業務（当該業務に係る労働者災害補償保険法（昭和22年法律第50号）第7条第2項に規定する通勤（当該業務に係る就業の場所を地方公務員災害補償法（昭和42年法律第121号）第2条第2項第1号及び第2号に規定する勤務場所とみなした場合に同条に規定する通勤に該当するものに限る。）を含む。）を公務とみなす。

(派遣職員の復帰時における処遇)

第6条 派遣職員が職務に復帰した場合におけるその者の職務の級及び号給については、部内の他の職員との権衡上必要と認められる範囲内において、規則で定めるところにより、必要な調整を行うことができる。

(職務に復帰した職員等に関する退職手当に関する条例の特例)

第7条 職員派遣後に復帰した職員が退職した場合（派遣職員がその職員派遣の期間中に退職した場合を含む。）における退職手当に関する条例（昭和36年鳥取県町村職員退職手当組合法第2号。以下「退職手当条例」という。）の規定の適用については、派遣先団体の業務

に係る業務上の傷病又は死亡は退職手当条例第5条第1項及び第5条の6に規定する公務上の傷病又は死亡と、当該業務に係る労働者災害補償保険法第7条第2項に規定する通勤による傷病は、退職手当条例第4条第2項、第5条第2項及び第5条の6に規定する通勤による傷病とみなす。

- 2 派遣職員に関する退職手当条例第6条の4第1項及び第7条第5項の規定の適用については、職員派遣の期間（育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律（平成3年法律第76号）第2条第1号に規定する育児休業の期間を除く。）は、退職手当条例第6条の4第1項に規定する現実に職務をとることを要しない期間には該当しないものとみなす。
- 3 前項の規定は、派遣職員が派遣先団体から所得税法（昭和40年法律第33号）第30条第1項に規定する退職手当等（同法第31条の規定により退職手当等とみなされるものを含む。）の支払を受けた場合には、適用しない。
- 4 派遣職員がその職員派遣の期間中に退職した場合におけるその者に支給する退職手当条例の規定による退職手当の算定の基礎となる給料月額については、部内の他の職員との権衡上必要と認められる範囲内において、規則で定めるところにより、その額を調整することができる。

（企業職員又は技能労務職員である派遣職員の給与の種類）

第8条 企業職員又は技能労務職員である派遣職員のうち、法第6条第2項に規定する業務に従事するものには、その職員派遣の期間中、給料、扶養手当、住居手当及び期末手当を支給することができる。

（特定法人）

第9条 法第10条第1項に規定する条例で定める株式会社（以下「特定法人」という。）は、次に掲げるものとする。

- (1) 町が資本金その他これに準ずるものを出資している株式会社のうち、町内に主たる営業所を有するもので、規則で定めるもの
- (2) 前号に掲げるもののほか、町が資本金その他これに準ずるものを出資している株式会社のうち、その業務の全部又は一部が地域の振興、住民の生活の向上その他公益の増進に寄与するとともに町の事務又は事業と密接な関連を有するものであり、かつ、町がその施策の推進を図るため人的支援を行うことが必要であるもので、規則で定めるもの

（退職派遣者とならない職員）

第10条 第2条第2項の規定は、法第10条第1項の条例で定める職員について準用する。

（退職派遣者を採用しなければならない場合）

第11条 法第10条第1項に規定するその他の条例で定める場合は、次に掲げる場合とする。

- (1) 法第10条第2項に規定する退職派遣者（以下「退職派遣者」という。）が特定法人の役職員の地位を失ったとき
- (2) 次に掲げる場合であって、退職派遣者を引き続き特定法人の役職員として在職させる

ことができないか又は適当でないと認められる場合

ア 退職派遣者の特定法人の業務への従事が法又はこの条例の規定に適合しなくなった場合

イ 法第 10 条第 1 項の取決めに適合しなくなった場合

ウ 退職派遣者が心身の故障のため、業務の遂行に支障があり、若しくはこれに堪えない場合又は長期の休養を要する場合

エ 退職派遣者が刑事事件に関し起訴された場合

(3) 公務上の必要その他特別の事情により退職派遣者を職員として採用することが必要であると認められる場合

(退職派遣者を採用することができない場合)

第 12 条 法第 10 条第 1 項に規定するその他条例で定める場合は、退職派遣者が特定法人の業務に従事すべき期間に、刑法（明治 40 年法律第 45 号）その他の法令の規定に違反した場合であつて、当該退職派遣者が引き続き職員として在職したものとみなしたならば、地方公務員法第 29 条の規定による免職の処分をすることが適当であると認められるときとする。

(取決めにおいて定めなければならない事項)

第 13 条 法第 10 条第 2 項に規定する条例で定める事項は、次に掲げる事項とする。

(1) 法第 10 条第 1 項に規定する要請に係る職員の特定法人における福利厚生に関する事項

(2) 前号に規定する職員の特定法人における業務の従事の状況の連絡に関する事項

(採用された職員に関する湯梨浜町職員の給与に関する条例の特例)

第 14 条 法第 10 条第 1 項の規定により採用された職員（企業職員である職員及び技能労務職員である職員を除く。以下同じ。）に関する給与条例第 26 条第 1 項の規定の適用については、特定法人において従事していた業務（当該業務に係る労働者災害補償保険法第 7 条第 2 項に規定する通勤を含む。）を公務とみなす。

(退職派遣者の採用時における処遇)

第 15 条 退職派遣者が法第 10 条第 1 項の規定により職員として採用された場合におけるその者の職務の級及び号給については、部内の他の職員との権衡上必要と認められる範囲内において、規則で定めるところにより、必要な調整を行うことができる。

(採用された職員に関する退職手当に関する条例の特例)

第 16 条 法第 10 条第 1 項の規定により採用された職員に関する退職手当条例の規定の適用については、特定法人の業務に係る業務上の傷病又は死亡は退職手当条例第 5 条第 1 項及び第 5 条の 6 に規定する公務上の傷病又は死亡と、当該業務に係る労働者災害補償保険法第 7 条第 2 項に規定する通勤による傷病は、退職手当条例第 4 条第 2 項、第 5 条第 2 項及び第 5 条の 6 に規定する通勤による傷病とみなす。

第 17 条 職員が法第 10 条第 1 項の規定により、任命権者の要請に応じ、引き続いて特定法人で、退職手当（これに相当する給与を含む。以下同じ。）に関する規程において、職員が、任命権者の要請に応じ、退職手当を支給されないで、引き続いて当該特定法人に使用される

者となった場合に、職員としての勤続期間を当該特定法人に使用される者（役員を含む。以下同じ。）としての勤続期間に通算することと定めているものに使用される者（以下「特定法人役職員」という。）となるため退職し、かつ、引き続き特定法人役職員として在職した後引き続き法第10条第1項の規定により職員として採用された場合におけるその者の退職手当条例第7条第1項の規定による在職期間の計算については、先の職員としての在職期間の始期から後の職員としての在職期間の終期までの期間は、職員としての引き続きいた在職期間とみなす。

- 2 前項の場合における特定法人役職員としての在職期間については、退職手当条例第7条（第6項、第7項及び第8項を除く。）の規定を準用して計算する。
- 3 法第10条第1項の規定により退職し、引き続き特定法人役職員となった場合においては、町長が定める場合を除き、退職手当条例の規定による退職手当は支給しない。

（委任）

第18条 この条例に定めるもののほか、この条例の施行に関し必要な事項は、町長が別に定める。

附 則

この条例は、公布の日から施行する。